

## 第 175 回山行記 三つ峠山 (1,785m) 2023/9/25



9月の三つ峠。山野草たちは宴を終え紅葉には未だ間があるか・・・25日の山楽会山行は12名のみとなった。三山観光の貸し切りバスは何時も通り6時に谷津船橋ICに入る。早起きでウトウトしていると7時半には談合坂SAに到着。更に進み河口湖に近づくとくっきりと富士山🗻が見えてくる。ボートから釣りをする人たちを河口湖大橋を渡りながら横目で



見ているとバスは山道に入りくねくねとした坂道を登り始め8時半に鬱蒼と木立が生い茂る三つ峠登山口に到着。早速、登山靴の紐を締め直しMSさんに倣って準備体操で体をほぐす。清流の涼やか音を耳にしながら舗装された緩やか坂道を10分程の歩くと公共トイレがありタイヤチェーンを付けたジープやキャタピラー車が数台重々しく駐車している。その片隅には弓なりの茎に鮮やかな紺紫の兜を幾つも連ねたトリカブトが鎮座して我々を出迎える。いよいよ樹木に深く覆われた山道をSSさんが先導して12名がややハイペースで一列となりジープの轍に従い歩き始める。木々を縫ってやって来る風がひんやりと頬に当たり何とも心地よい。暫く歩くと木々の間から木漏れ日がさし首筋に



汗が滲みだすと隊列もばらけ始める。やがて予定の 10 時にベンチと呼ばれる開けたスペースに到着すると夫々はホットして荷物を降ろして休憩となる。持ち寄った菓子をワイワイ言いながら交換するのも楽しみの一つ。一息ついて歩き始めると道端にトウモロコシの

様な粒々が鮮紅色の実を付けたマムシグサ。よく見ると半分が黒いもの全体が黒いものもある。「使用前、使用中、使用後なのネ」との女性の声に変な想像をして思わず自嘲。そして



見つけました。絶滅危惧種のカイフウロが路肩に弱々しく一輪。病床の佳人は薄桃色の五弁花を精一杯広げ空を見上げている。やがて山道わきの路肩のあちこちに猛毒を秘め蒼い微笑を浮かべたトリカブトが点在すると道が開け三つ峠山荘に



到着。迫り出した展望台からの眼前には紺碧の空を背にした富士山。雪の無い薄茶色の富士山。やや霞がかかった富士山はギザギザに刻まれた頂上の両脇から裾野をなだらかに緩やかに滑らして長々と広げる。中腹に白雲が細長くたなびき威容を際立たせる神秘的な存在感は紛れもない富士山として人々の心を奪う。人の気配の無い四季楽園の山小屋を過ぎると階段状の道となり砂礫の斜面には赤紫のフジアザミが剣玉サイズ

の頭を重たそうに垂らして群生している。赤紫の細長い筒状花を幾重にも重ねた丸頭の襟裳元には尖った総苞片がひっくり返る。富士山周辺だけにしか見られない何とも奇妙なアザミ。そして階段を登りきると海拔 1785m の開運山の頂上に 11 時に到達する。三つ峠は開運山・御巢鷹山・木無山から成る連峰であるが今回は開運山と木無山の 2 山のみ山行となっている。狭い山頂の中央にある「三つ峠」の石碑に 12 名が肩を寄せ合うと、食事の登山者に無理を言って御願いで富士山を背景に「はいチーズ」。昼食は三つ峠山荘前の日当たりの良い小高い丘の上。衣替え前のナナカマドが枝から幾つも房状の赤い小果を吊り下げている。標高





1700mの太陽はもはや夏の力を失い小春日和のようなポカポカ陽気。のんびりとして富士を眺めて午睡気分。暫く休んだ後に次の目的地の木無山に向かうが、何処にあるかと周りを見渡すも山影は無い。疑心暗鬼のまま地図を確かめ10分程歩くと木無山の道標。此処が山頂かと思えど確かに“木は無く”街中の駐車場程の広さの草原がある。そして

その向こうにはやはり富士山。下山は来た道を降り予定より30分早い13時に三山観光のY運転手が長々と待機していた三つ峠登山口に到着。今回の山行の目玉は立ち寄り温泉「富士眺望の湯 ゆらり」。ところが午後になると富士山は雲に包まれて嫌な予感。入口には「カメラ持ち込み禁止」の“当たり前”の張り紙。まずは洞窟風呂という洞窟サウナの風呂を楽しんだ後、いざ露天風呂へ。矢張り富士山は雲の中・・・と、がっかりして湯に浸かっていると雲が流れ始め富士山が忽然と姿を現す。その雄大な威容にカメラを持ち込みたくなる気持ち分かる。風呂の後と言えばビールが定番。この楽しみの為に山に登るのかと疑いたくなる様に一同幸せ顔。15時半に帰路につくが渋滞に巻き込まれ津田沼には予定より30分遅い18時半。それでも何時もの時間だが日が短くなり随分と暗くなっていた。〈HN記〉